

「ニュースの裏を読む：韓国の政治文化と地域対立」

永野慎一郎 (Ph. D.)

アジア近代化研究所理事、東アジア政経アカデミー代表

1. 金大中構想：政敵朴正熙の娘を大統領に

金大中元韓国大統領は大統領在任中に生涯の政敵であった朴正熙元大統領の令嬢朴槿恵を国家指導者に育成し、亡国的な地域感情、イデオロギーの葛藤、政治報復を清算しようとする一大プロジェクトを推進していたというのだ。仮称一級秘密“2002年グランドプラン”と称されるこのプロジェクトは秘密裏に進められたもので、関係者の間では、“GP-Project”と呼ばれていた。“一級秘密”という用語は韓国では、政治家たちが敏感な政治問題を取り扱う時に、特に保安のために使用する用語である。

“GP-Project”は、大統領を作るためのグランドプランであり、高度な作戦計画であった。この計画は未完のまま終わったが、その10年後、朴槿恵が有力な大統領候補として浮上した2012年3月に当時の事情を知っていた関係者によって公にされ、韓国の政界で話題となった。

このプロジェクトの発案は全羅道出身の金大中元大統領であり、カウンターパートは全羅道と対立関係にあった慶尚道出身で、全斗煥政権、盧泰愚政権、金泳三政権（共に慶尚道出身）の三政権において党代表など要職に就き、キング・メーカーとしても知られていた金潤煥であった。金潤煥は韓日議員連盟会長

も務めた有力者である。プロジェクトには金大中の側近の権魯甲と盧泰愚政権で内務部官などを務めた慶尚道出身の金泰鎬が加わった。金大中の最側近権魯甲も元は慶尚道出身である。そのために橋渡し役が可能であったかもしれない。このプロジェクト存在の真偽は関係者3人が既に故人となっており、真相を知っている生存者は権魯甲のみである。権魯甲が真相を明らかにしない限り確認するすべはない。しかし、秘密はいつか漏れるものである。金潤煥側で密かに手伝いながら、内容をつぶさに知っていた人物が事実を明かしたものだ。

韓国社会には積年の弊害である地域対立およびイデオロギー対立が依然として存在しており、選挙の度に政治家やマスコミの扇動によって個人の価値観や思想、好みよりも置かれている立場の集団的な地域性が優先されている。地域対立は結果として地域間の経済的格差を発生させていることから、イデオロギー的葛藤として政治の場面で表われている。良識の知識人たちは不毛な対立はもう止めようと訴えているが、根深い対立構造を崩せない状況である。その背景には怨念に近い地域感情が長年の歴史の中で複雑に絡み合い、社会全般にわたって根を張っている。それを利用する人たちがいる限り、そう簡単に解決できないのが実情である。

朴正熙と金大中の対立が象徴しているように、朴正熙の出身地慶尚道と金大中の出身地全羅道の地域対立である。1960年代以降、産業化勢力と民主化勢力の対立として顕在化した。また、対北朝鮮問題をめぐっても保守と進歩というイデオロギー的対立が重なり、その対称軸の中心が朴正熙と金大中であった。そのために二人は宿命的な政敵であると自他ともに認めている。金大中は在野の政治指導者として苦難の政治生活を体験した。軍事独裁政権に反対し抵抗したことで殺されかけたこと5回、獄中生活6年、自宅監禁や亡命生活10年以上であった。波乱万丈の政治生活の大部分は独裁政権との闘争であった。様々な政治弾圧を受け、“大統領病”と陰口をたたかれながら4度目の大統領選への挑戦で、政治力学の巡り合わせによって大統領の座を手に入れた。

大統領という最高の権力を勝ち取った金大中が選りによって、自分を弾圧した政敵朴正熙の娘を大統領に育てたいという発想がどうして生まれたのか、二人の関係を知っている韓国人なら、ありえない話としか思えないほどの重大問題である。もし2002年の当時、このような話が公にされたならば、韓国社会をひっくり返すほどの大事件になったに違いない。韓国では金大中のような老練な人を政治9段と称している。政治のことなら隅々まで知っているベテラン政治家を指して与えている称号である。政治9段の金大中が一体何を考え、どのような政治を試みようとしたのか、先入観と偏見なしに、その発想の根源を探ってみることにする。

2.“2002年グランドプラン”の背景

金大中は平素側近たちに「これから湖南(全羅道)出身大統領が誕生することは、駱駝が針の穴に入るくらい難しい」と語っていた。考えてみると、金大中自身もやっとの思いで、しかも運よく漁夫の利で、いくつかの有利な要素が重なって当選したことは周知のことである。それは誰よりも本人がよく知っているはずである。李仁済という第3候補が与党ハンナラ党の公認選びの予備選挙で敗北し、脱党して国民新党を設立して公認候補として立候補し、与党票を食った。それだけでなく、慶尚道、全羅道以外の第3地域の忠清道の盟主金鍾泌と朴正熙の側近で浦項総合製鉄所創業者朴泰俊によるいわゆるDJT連合が成立し、忠清道票を取り込むことができた。しかも与党ハンナラ党公認候補李会昌には二人の息子が兵役を不正に忌避したという悪材があったことも勝因の一つであった。選挙結果は、金大中 10,326,275 票 (得票率 40.3%)、李会昌 9,935,718 票 (38.8%)、李仁済 4,925,591 票 (19.2%)、その他4人の候補合計 454,854 票 (1.8%)。金大中は2位李会昌に390,557票差で大統領選に勝利したが、国会は野党ハンナラ党が多数を占めている中で、連合政権の自民連とは政策上の差があり、野に下った旧与党ハンナラ党はじめ既得権勢力の執拗な反対と妨害に会い、政権運営は出発から混迷であった。

金大中、李会昌、李仁済有力3候補の地方別得票率をみると、地域対立が顕著であるという証拠である。金大中候補は首都圏のソウル市・仁川市・京畿道を抑え、また、自民連との連合の効果があって、忠清道票も取り込

み、全羅道では90%台を獲得した。反面慶尚道では10%台獲得にすぎなかったため、約39万票差で当選が決まった。

韓国の人口構成は、総人口 50,851,082 人（2012年7月末現在）のうち、ソウル市 10,227,761 人、京畿道 12,021,422 人、仁川市 2,824,150 人の首都圏人口が 25,073,333 人と韓国人口の半分を占めている。大統領選挙になると、首都圏は大票田である。しかも高学力の知識人が多く居住していることから中立の浮動票が多い。もう一つの要素は嶺南地

方（慶尚道）と湖南地方（全羅道）の出身地の対立である。韓国の全人口の約半分は首都圏に居住しているが、首都圏の出身地別人口構成はそれほど変わらないので、慶尚道対全羅道の対立軸になると、圧倒的に人口が多い慶尚道の方が有利である。全羅道人口は慶尚道人口の40%にすぎない。地域対立が現存する限り、大統領選挙で全羅道出身は絶対に勝てないという計算になる。金大中大統領は長年の政治経験を通じてそれを見抜いたのだ。

表1 第15代大統領選挙地域別得票数・得票率

	李会昌		金大中		李仁済	
	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率
ソウル市	2,394,309	40.9%	2,627,308	44.9%	747,856	12.8%
仁川市	470,560	36.4%	497,839	38.5%	297,739	23.0%
京畿道	1,612,108	35.5%	1,781,577	39.3%	1,071,704	23.6%
江原道	358,921	43.2%	197,438	23.8%	257,140	30.9%
大田市	199,266	29.2%	307,493	45.0%	164,374	24.1%
忠清南道	235,457	23.5%	483,093	48.3%	261,802	26.1%
忠清北道	243,310	30.8%	295,666	37.4%	232,254	29.4%
光州市	13,294	1.7%	754,159	97.3%	5,181	0.7%
全羅南道	41,534	3.2%	1,231,726	94.6%	18,305	1.4%
全羅北道	53,124	4.5%	1,078,957	90.7%	25,037	2.1%
釜山市	1,117,069	53.3%	320,178	15.3%	623,756	29.8%
蔚山市	268,998	51.4%	80,751	15.4%	139,824	26.7%
大邱市	965,907	72.7%	166,576	12.5%	173,649	13.1%
慶尚南道	908,808	55.1%	182,102	10.8%	515,869	31.3%
慶尚北道	953,360	61.9%	210,403	13.7%	335,087	21.8%
済州道	100,103	36.6%	111,009	40.6%	56,104	20.5%
全 国	9,935,718	38.7%	10,326,275	40.3%	4,925,591	19.2%

出所：大韓民国第15代大統領選挙（ko.wikipediaより作成）

1997年12月に実施された第15代大統領選挙の地域別得票数及び得票率は表1の通りで

ある。政党公認候補は支持基盤である地域の票をまとめて獲得していることが一目瞭然である。光州では地元出身候補の金大中が97%獲得、対する李会昌は1.7%。一方、慶尚道での金大中の得票率は軒並み10%台。いずれの地域も結束力の強さが表われている。これが地域対立の実情である。

金大中政権の誕生によって水平的政権交代が行われた。保守派大統領から進歩派大統領への政権交代であった。また、軍事独裁政権から民主化勢力への政権交代でもあった。これは経済発展によって国民の選択の幅が広くなり、金大中のような野党闘志が大統領に選出されるほど民主主義が成長したという証左でもある。

韓国の大統領は強い権限を持っていることから、大統領にさえなれば何でもできると思っていたとすれば、それは大変な間違いであろう。それは独裁政治時代のことであり、民主化された時代には通用しない。大統領や各省庁のトップが代わっても、官僚組織や社会のあらゆる分野で既特権層が長年にわたって根を張り、良くて悪くてもシステム化されているため、それを崩すことは並大抵のことではない。地域格差の温床となっていた予算配分は、政権が代わったからと言って勝手に動かせるわけでもない。ましてや必要な人材が急に養成できるはずではなく、地域格差是正や社会の不条理などの是正も短期間で解決できる問題ではない。そうすると、支持層からの不満も噴出する。最高指導者となった金大中自身もこのような状況に気が付いたとしても不思議ではない。このような思いから、金大中は大統領在任中にことを起こそうとし、

発想の転換をしようとしたかも知れない。金大中は一大プロジェクトを構想し、カウンターパートとして慶尚道出身の老練な政治家金潤煥を選定し、極秘に会談を持ちかけて、プロジェクト構想を説明し協力を要請したというのだ。

金大中大統領は、「私は自由民主主義と南北平和統一のために生涯を捧げてきた。しかし、未だに政治は党利党略で政争に明け暮れている。南北平和統一への道は遠ざかっている。政治の先進化と南北平和統一の早期実現のためには亡国的地域感情とイデオロギーの葛藤の壁を乗り越えなければならない。私が先に大統領の政治的既特権を捨てて、政敵の娘を国家指導者として育て、地域感情、イデオロギーの葛藤、政治報復を清算し、国民大統領の道を開きたい。その間、民主化闘争をしながら、朴正熙政権に過酷な拷問、家宅軟禁、人権蹂躪など筆舌に尽くし難いほどの迫害と抑圧を受けた。その時の状況を表現することは容易ではない。国家と民族の将来のために、容赦・和解・包容の大乗的な見地に立って、一大決心をしたい。国家と民族の運命がかかった“2002年グランドプラン”を準備して欲しい」と協力を求めた。

金潤煥は反対勢力の現職大統領が真摯に語りかけている態度に感動し、信頼できる側近金泰鎬と実務を担当させる李テホを呼んで、くれぐれも保安に注意せよと言いながら、「この国に政治報復をなくし、亡国的地域感情とイデオロギーの葛藤を解消するために救国の決断をした金大中大統領の意志を尊重し朴槿恵を国家指導者に育て上げるための特別プランを作って欲しい」と要請したというのだ。

しかし、ことはそう簡単なものではない。このプロジェクトが成功すれば、韓国政治における最大の課題であった国民大統領が実現し、南北朝鮮の平和統一が達成されるのであれば、朝鮮半島は明るい未来を迎えることになる。素晴らしい発想であることは間違いがない。実現されて始めて価値があるのであって、実現までは大きな山がいくつもある。民主化闘争のホープとしての金大中を4度目の挑戦でようやく大統領に当選させた民主化勢力および無条件支持を惜しまなかった全羅道地域の支持者たちが政敵の娘を国家指導者として育てるというアイデアを素直に認めるのかは大変な難題であった。全羅道出身の大部分は朴正熙政権以来、歴代慶尚道政権下での被害者意識を持っている。国土開発の後回し、人事面での差別待遇、予算配分の差別など枚挙に暇がないからである。

3. 次善の策として盧武鉉大統領選

2002年2月から新千年民主党大統領候補予備選が始まった。まず済州道から予備選の幕開けとなった。有力候補の中には金大中大統領を永年支えてきた秘書出身の韓和甲がいた。金大中直系を“東橋洞系”(東橋洞は金大中の居住地の町名)と称し、韓は“東橋洞系”のホープで、演説のスタイルが金大中そっくりということで“リトルDJ”(DJはDae-Jungのイニシアル)と呼ばれた忠実な家臣であった。さらに金大中とは同郷である。しかし、金大中大統領の本心を確認せず、独自に大統領選に打って出たが、大統領の支援を受けることはできなかった。今考えれば、“2002年グランドプラン”のための犠牲者であったか

もしれない。

韓和甲は、大統領予備選開幕戦の済州道で175票を得票し、わずかながら172票得票の李仁済を抑えて1位に躍り出た。盧武鉉は125票で3位であった。次に行われた蔚山市では、慶尚道出身の盧武鉉が298票で1位、李仁済222票、韓和甲は116票であった。問題は光州市の予備選結果である。韓和甲は出身地の全羅南道、全羅北道および光州市で、金大中同様、圧倒的多数票を獲得し、勢いに乗る作戦であった。しかし光州市では見えない手が動いたのだ。金大中大統領の意中の人は盧武鉉であるという噂があつという間に広がった。韓和甲支持票が盧武鉉支持に移動し、結局、盧武鉉が1位の595票獲得し、李仁済は491票、韓和甲は280票止まりとなった。韓和甲は盧武鉉の半分以下であった。先行きが見通せない韓和甲は“金心”が自分ではないということが分かると、先に進めることは無意味であると判断し、候補辞退に踏み切った。候補辞退後、韓は党代表選に立候補し党代表となった。新千年民主党党首として盧武鉉大統領候補を支援し当選させた。結局、二人の間に不協和音が生じ、盧武鉉大統領は支持勢力を引き連れて新千年民主党を脱党して新たに「開かれた民主党」を結成した。

朴槿恵を大統領にという“2002年グランドプラン”は朴槿恵がハンナラ党の予備選に参加しなかったことから消滅してしまった。朴槿恵自身は自分を大統領にするという動きがあることを知っていたかどうかは不明だが、予備選不参加を宣言してしまった。また、金大中側の担当者である権魯甲の方にも2001年末に一身上の問題が発生し、進行できる状

況ではなかった。

それにしても政治感覚が鋭く、政治のことはなんでも知り尽くしている金大中大統領が簡単に諦めることはない。後継者として、同郷の愛弟子韓和甲では勝算がないと判断していたからこそ、朴槿恵を用意したのであり、朴槿恵を通じて念願の地域感情やイデオロギー葛藤、南北関係の改善などの解決の道を考えて。しかし、朴槿恵の方は準備が進まず、早い段階で大統領選への出馬を放棄してしまった。朴槿恵がだめなら他に勝てる候補を物色しなければならない。次の手を用意したのだ。盧武鉉は光州で強い地盤を持っていた韓和甲を抑え、1位に躍り出た。もしかしたら、金大中大統領が描いていた“2002 GP - Project”の第2幕であったかも知れない。

盧武鉉候補は新千年民主党大統領選予備選で勝利し、同党の公認候補となったものの、相手は前回の大統領選挙で金大中候補に惜敗した、第1野党ハンナラ党代表李会昌であった。各種世論調査は李会昌候補が有利な選挙戦を展開していた。しかし、李会昌候補には息子たちの兵役忌避問題があり、逆転のチャンスがあった。“ノサモ”(ノ・ムヒョンを愛する会)で代表されるネティズンの影響力をうまく活用し、選挙戦を勝ち抜いた。20代、30代の若い世代は改革性向が強く、盧武鉉候補に好感を持っていたことから、携帯電話やインターネットなどを通じて投票参加を呼び掛ける戦術を取った。それが見事に当たった。

慶尚道出身の盧武鉉候補は金大中が築き上げた民主党の支持母体である全羅道で圧倒的多数の票を獲得して当選に結びつけた。光州市95%、全羅南道93%、全羅北道92%の得票

率は4年前に金大中がこの地域で獲得した票に匹敵した。盧武鉉は圧倒的多数の全羅道票を基礎にして大統領に当選した。しかし、政権発足1年後、新千年民主党から離脱し、親盧派を中心に「開かれた民主党」を結成して独自路線を歩み始めた。

4. 朴槿恵政権の課題

昨年12月に実施された第18代大統領選は、保守系を代表するセヌリ党公認の朴槿恵候補と革新系の民主統合党公認の文在寅候補間の争いとなった。

文在寅候補は親盧派の手厚い支持を受けて、予備選を勝ち抜き、党公認候補となり、全羅道地域を支持基盤として大統領選に臨んだ。選挙戦は朴槿恵候補と文在寅候補の一騎打ちとなった。全羅道の民心は独裁者朴正熙に対する反感が強く、当然その娘に対するイメージも父親と重なり、慶尚道への対立軸が依然として働いていた。文在寅候補自身、盧武鉉大統領の直系で慶尚道出身であるが、統合民主党が全羅道を基盤としているため、党公認候補であることから一体感を持っていた。今回の大統領選も激しい選挙戦となり、最後まで勝敗が分からないほど熱戦であった。選挙結果は表2が示しているように地域間対立がそのまま表れた。

朴槿恵は全国各地域において万遍なく得票し当選した。しかし、選挙戦が始まる前から全羅道票を意識して支持層拡大に努めたが、やはり全羅道票を取り込むまでは至らなかった。光州市7.8%、全羅南道10%、全羅北道13.2%の得票止まりとなった。全羅道の壁は厚かったことを実感した。

表2 第18代大統領選挙地域別得票数・得票率

	朴 槿 恵		文 在 寅	
ソウル市	3,024,572	48.2%	3,227,639	51.4%
仁川市	752,600	51.6%	794,213	48.0%
京畿道	3,528,915	50.4%	3,442,084	49.2%
江原道	562,876	62.0%	340,870	37.5%
大田市	450,576	50.0%	448,310	49.7%
世宗市	33,587	51.9%	30,787	47.6%
忠清南道	658,928	56.7%	497,630	42.8%
忠清北道	518,442	56.2%	398,907	43.3%
光州市	69,574	7.8%	823,737	92.0%
全羅南道	116,296	10.0%	1,038,347	89.3%
全羅北道	150,315	13.2%	980,322	86.3%
釜山市	1,324,159	59.8%	882,511	39.9%
蔚山市	413,977	59.8%	275,451	39.8%
大邱市	1,267,789	80.1%	309,034	19.5%
慶尚南道	1,259,174	63.1%	724,896	36.3%
慶尚北道	1,375,164	80.8%	316,659	18.6%
済州道	166,184	50.5%	161,235	49.0%
在外国民	67,319	42.8%	89,192	56.7%
全 国	15,770,926	51.55%	14,689,991	48.02%

出所：大韓民国第18代大統領選挙 (ko.wikipedia より作成)

朴槿恵候補は早い段階から、何度も全羅道に足を運び、父親に対する過誤を謝罪し、二度と地域差別政治をやってはならないと約束した。ハンナラ党代表の時の2004年には退任後の金大中前大統領を訪問し、父親時代に数々の被害を受け、苦勞なされたことに対して、娘として申し訳ありませんと謝った。金大中はとっても有難かった。「世の中にはこんなこともあるもんだな」と語り、朴正熙が生き返って私に和解の握手をしようとしたと思いい、とっても嬉しかった。謝罪は独裁者の娘がしたのであるが、本当に自分が救われたような気分であったと語ったことがある。

朴槿恵のひたすら低姿勢の選挙キャンペーンに援軍が表われた。金大中政権時代の有力

者が次々と、朴槿恵候補支持を宣言したのだ。金大中大統領の秘書室長まで務めた韓光玉はセヌリ党に入党し、先頭に立って選挙応援した。もう一人金大中と苦節を共にした“東橋洞系”ホープの韓和甲は、前述の通り、金大中政治の継承者を自認し、大統領選へ立候補したが、最も頼りにしていた金大中大統領の意中では他にあることを察し、涙を飲んで大統領選を途中下車した経緯の持ち主である。“東橋洞系”を束ねる家臣グループは“両甲”(韓和甲と権魯甲)が右腕と左腕の役割を担いながら親分の金大中を支えた。

韓和甲はソウル大学外交学科を卒業した国際通として、民主化運動時代は武闘派が多い家臣グループの中では唯一の知識人として知

られていた。韓和甲はかつて金大中の片腕として慶尚道の責任者を任せられ、民主化運動活動のなかで多くの慶尚道の人たちに接していたことから、慶尚道に幅広い人脈を持ち、人望も厚かった。彼は盧武鉉政権と袂を分かってから、少数民主党を守るべく独自路線で政治活動を展開していたが、限界を感じ、政治の第一線から離れかけようとしている時、朴槿恵陣営から誘いを受けたのだ。韓和甲は中道保守性向であった。

朴槿恵とは3回あったことがあるが、印象は悪くなかった。朴槿恵が会いたいというのなら、会ってもいい。地域対立の元凶である独裁者朴正熙の娘朴槿恵が本気でやるのであれば解決できるはずだ。むしろその方が望ましい。会って真意を確かめたいと伝えた。

韓和甲は未だに後れている全羅道地域の発展のためにやりたいことが山ほどあった。しかし、国会議員でもない身分ではどうしようもない。民主統合党文在寅候補だけは支持できない。なので、大統領選挙では中立を決め込んでいた。朴正熙は金大中の政敵である。したがって、朴槿恵にも功罪はある。しかし韓は彼女が否定的なものを肯定的に変えられる政治家であると判断した。大統領の令嬢として大統領官邸で生活し、母親の死後はファスト・レディを務めながら帝王学を学んだ。また、政治を志し、長年に亘り準備してきた。文在寅候補のように、ある日突然現れた人物とは違う。

朴槿恵が積年の弊害である地域感情をなくし、東西和合と国民統合を達成してもらえるのであれば、それ以上のものはない。独裁者の娘が解決してくれれば本当の解決であり、

またやりやすい。朴槿恵と会って自分の意志を伝えることにした。それが真の地域の和解でもあると考えた。

韓和甲は大統領選挙日の2週間前に朴槿恵候補と会い、嶺南・湖南和合と国民統合のために、開発が後れている湖南地域を優先的に開発すること、人事面で差別せず公平な人事をすること、朴正熙時代の緊急措置による被害者に補償すること、対北朝鮮融和政策の継続などの要求条件を必ず実行すると全羅道の遊説の時に公言すれば、直ちに公の場で支持宣言すると約束した。朴槿恵は光州や木浦などの遊説先で、この地域出身の大政治家韓和甲先生と約束したことを大統領に当選したら、絶対に守ると公言した。これを受けて、韓和甲はその翌日、ソウルの憲政会館で講演し、朴槿恵支持を宣言した。この内容はTVでも中継され、関心の高さが示された。リトルDJとも言われていた金大中の愛弟子が政敵の娘を支持したということで国民の関心も高くなり、それ以後、韓和甲は引っぱり無しにTVに出演し、熱弁をふるった。

韓和甲は朴槿恵支持宣言をただで、セヌリ党に入党したり、遊説に参加したりはしなかった。TV出演で彼の主張を聞いた旧支持者たちは概ね二つの反応があった。全羅道地域、特に民主党支持者たちは彼の行動に理解を示すところか、裏切者呼ばわりであった。一方、首都圏や他の地域の支持者の間ではよくも思い切った行動をしたと高い評価を与える人もいた。韓和甲の役割が朴槿恵大統領当選にどれほど貢献したかについては計り知れない。出身地別を問わず良識のある人たちは望ましい行動であったと評価している。21世

紀はグローバル化が進行している。民族及び国境を超えて自由に移動している時代に、小さな半島の中で、南北に分断され、体制間の対立が続いているなかで、慶尚道とか全羅道に分かれて地域的に対立し、角逐していることは不毛な争いのような気がしてならない。全羅道と慶尚道の対立は、古くは三国時代(高句麗、新羅、百済)にまで遡ると言われている。高句麗は現在の北朝鮮地域(中国東北地方を含む)、新羅が慶尚道地域、百済が全羅道や忠清道地域であったことから、その延長線で考えられている。しかし、三国時代以後は高麗(918年~1392年)及び朝鮮王朝(1392年~1910年)の993年間、日韓併合後の35年の植民地統治を経て、解放後は米軍政が続

き、大韓民国樹立後の初代大統領は北朝鮮地域出身の李承晩であった。これらの時代に嶺南・湖南対立があったとは思えない。

1961年に軍事クーデターによって政権を取った朴正熙軍事政権誕生からであったと見た方が素直であろう。朴正熙が軍服を脱ぎ、大統領選に最初に立候補した1963年の第5代大統領選挙時は、民主共和党公認朴正熙は全羅南道で57.2%、全羅北道で49.4%獲得し、対立候補民政党公認尹潽善は全羅南道35.9%、全羅北道41.5%獲得した。当時、尹候補は首都圏で圧勝し、出身地の忠清道で多数得票したにも拘わらず落選した。朴候補は慶尚道票と全羅道票で当選したようなものだ。

表 3 韓国の大統領選挙結果(1987年~2012年)

第13代大統領選挙(1987)	第14代大統領選挙(1992)
盧泰愚(民主正義党) 36.6%	金泳三(民主自由党) 42.0%
金泳三(統一民主党) 28.0%	金大中(民主党) 33.8%
金大中(平和民主党) 27.0%	鄭周永(統一国民党) 16.3%
金鍾泌(新民主共和党) 8.1%	
第15代大統領選挙(1997)	第16代大統領選挙(2002)
金大中(新政治国民会議) 40.3%	盧武鉉(新千年民主党) 48.9%
李会昌(ハンナラ党) 38.7%	李会昌(ハンナラ党) 46.6%
李仁済(国民新党) 19.2%	権永吉(民主労働党) 3.9%
第17代大統領選挙(2007)	第18代大統領選挙(2012)
李明博(ハンナラ党) 48.7%	朴槿恵(セヌリ党) 51.6%
鄭東永(大統合民主新党) 26.1%	文在寅(民主統合党) 48.0%
李会昌(無所属) 15.1%	
文国現(創造韓国党) 5.8%	
権永吉(民主労働党) 3.0%	

しかし、慶尚道と全羅道の対立は朴正熙政権誕生以来、産業化が進行している中で地理

的な要因もあって、京釜高速道路建設、浦項総合製鉄所建設などインフラ整備において大

型プロジェクトはほとんど慶尚道に偏在し、人事登用が目に見えほど偏っていたと言われている。また、朴正熙が最も嫌っていた国会議員が青年政治家金大中であった。雄弁で緻密な調査をして対政府質問をする金大中を何とか落選させようと、金大中の選挙区木浦に与党から有力者を立候補させ、支援の一環として木浦で臨時閣議を開くなど様々な工作をしたにも拘わらず失敗に終わった。当時、木浦選挙区は注目の的となり、むしろ朴正熙が金大中をライバルとして育てたようなものだった。1970年に金大中は46歳の若さで第一野党新民党の大統領候補に指名され、軍政延長・長期政権反対をスローガンに朴正熙と争った。朴正熙は「大統領選出馬は今回が最後」と繰り返し強調し、ようやく当選した。それから金大中は様々な迫害を受けることとなった。まさに怨念の二人の関係となった。朴正熙と金大中の政治的ライバル関係が二人の出身地の慶尚道と全羅道の対立関係を増幅させたと見た方が正しいかもしれない。したがって、当事者が解決に努めなければならないと金大中は考え、政敵の娘である朴槿恵に解決のカギを渡そうとしたかも知れない。

韓和甲の朴槿恵支援は金大中の直接的な言い渡しなどがあったとは思えない。門下生として苦節を共にしながら、学び得た政治哲学の中でたまたま一致する部分があったのではないかと考える。朴槿恵政権は発足して6ヶ月経過した。発足当初は人事問題でつまずき、対北朝鮮問題への対応などに追われていたこともあって、目に見える形の成果はまだ表れていない。8月初旬、秘書室長を始め、一部の首席秘書官を入れ替えるなど、新しいスタッフで、これから本格的な政権運営に乗り出していると見られる。韓和甲との約束の履行はさておき、父親時代の負の遺産を清算し、父親が達成した経済成長を踏まえて韓国がさらなる発展を遂げ、国際社会から羨ましく思えるような国づくりをするためには、東西和合と南北和解は解決しなければならない最優先課題である。この二大課題が達成できれば他の政策はむしろ進めやすい。現体制で利益を得ている既得権層の非協力または妨害も当然覚悟しなければならないが、ひるむことなく、原点に戻って大道を進めば道は開かれると期待している。(2013年8月7日脱稿)

IAM e-Magazine 第6号

2013年9月15日発行、特定非営利活動法人アジア近代化研究所 (IAM)